

# 石黒忠篤と民俗学周辺

郷土会での活動を中心に

和田 健

Tadaatsu Ishiguro and Periphery of Folklore Studies : Focusing on His Activity at Kyodokai

WADA Ken

はじめに

① 石黒の業績と生涯そして民俗学周辺の人々との関わり

② 郷土会と石黒の関わり

③ まとめおよび今後の作業について

## 【論文要旨】

本稿では近代農政史上中核的人物であった石黒忠篤の業績と柳田国男との接点である郷土会での活動を中心に検討を試みたい。その目的は、柳田が考えていた農村観・農民観が石黒の施策の中にどのような影響を与え、そして官僚、政治家として石黒がそれをどのように実践していったかを明らかにするところにある。その当初の場が新渡戸稲造を中心とする郷土会での活動であったからである。

まず石黒の生涯を概観しながら、彼の生涯を通しての郷土研究や民俗学と関わる人々との接点を明らかにする。そして石黒が農村、農家、農民に対して興味関心を示した経緯と、のちに農政官僚として取り組んだ施策とどう関連するかについて言及した。そして次に、石黒が積極的に参加した郷土会での例会報告の分析を行った。それにより彼のちに実践する小作慣行調査、食糧管理制度の端緒となる米価調整対策そして戦時体制下直近における農山漁村経済更生運動における施策に示される問題意識を探る。石黒の郷

土会における報告は、農村、農家における口碑、旧来よりの社会組織をおさえた上での農村の歴史的背景を考慮する視点を垣間見ることが出来る。石黒は「部類の調査好き」を自認し、全国的な米の生産費調査、小作慣行調査をしたことはよく知られている。それらの大がかりな調査に対する問題意識が郷土会での活動報告により確認することが出来る。

柳田と石黒に共通している近代的な農村、農民意識は、より深い検証が必要ではあるが「旧来よりの慣行を考慮した労働の協同性とそれを踏まえた上での合理的組織の確立」「自立した経営ができる中核的人物の養成」であると筆者は認識している。そのことを考察する端緒が郷土会で示した石黒の取材報告に現れていると思われるのである。

【キーワード】 石黒忠篤、農政官僚、柳田国男、郷土会、農業施策